

V 夏秋いちごの栽培管理編

1 いちごの生理・生態

(1) 温度への反応

(単位：℃)

生育・生理反応	限界最低温度	適 温	限界最高温度
栄養生長一般	(0)	17～20	30
葉の生育 (気温)	20	20～25	28～30
根の生育 (気温)	13～15	18～23	(25)
水分の吸収 (地温)	9～12	18～21	(25)
肥料の吸収 (地温)	12～15	18～21	(25)
花粉の発芽	6	20～30	35
果実肥大 (昼温)	10～15	20～24	35
果実肥大 (夜温)	0	6～10	14
果実の成熟	10	15～20	30

(2) 花芽分化と温度・日長の関係

●四季成り性品種

0℃	5℃	10℃	15℃	20℃	25℃	30℃
花芽形成は停止 (休眠)	日長に関係なく花芽を形成		日長に関係なく花芽を形成するが、長日条件で花房数が増加		花芽の形成が抑制される	

●一季成り性品種

0℃	5℃	10℃	15℃	20℃	25℃	30℃
花芽形成は停止 (休眠)	日長に関係なく花芽を形成		短日条件 (8～13時間) で花芽分化		日長に関係なく花芽分化しない	

(3) 休眠

休眠は、日が短くなってくる10月頃に始まり、低温で深まり、一定時間の低温に遭遇すると打破される。半休眠状態では花房が連続出蕾しやすく、休眠が完全に打破されるとランナーが旺盛に発生する。

休眠打破のための低温要求量は、5℃以下の積算時間で示され、品種によって異なる。

〈例〉「夏のしずく」を自家増殖する場合

親株を5℃以下に1000時間以上遭遇させる。

(4) 光合成産物の転流特性

光合成でつくられた同化養分は、開花以前はその7割が根とクラウンに転流される。果実肥大期以降、根への分配は激減し、果実への転流が9割を占めるようになる(果実肥大期以降に根やクラウンを養成することは難しい)。

2 ハウスの温度管理

生育段階に応じた適温を意識して管理する(自動換気装置がある場合は、温度設定を変更する)。

春定植

生育段階	目標温度・換気のポイント	目的・注意点
畦立てマルチ後～ 定植前日まで	地温 15℃目標 (最低 12℃) 全閉め(晴天日5日以上)	定植前に地温を高めておく
定植～開花始めまで	日中 18～23℃ 夜間 15～18℃ 地温 18～23℃ 最低気温 10℃以上 夕方に、翌日の最低気温を確認し、10℃以上の場合は夜間もサイドを細めに開けておく。	根の生育適温で管理し、同化養分を貯める 冷たい東風に当たった場所からうどんこ病が発生しやすい。 →東側の換気幅調整 →予防防除 <u>×高温管理では、葉の展開が早く、出蕾も早まりやすい。葉の寿命も短くなる。</u>
開花始め～収穫期 (高温期)	日中 20～24℃ 花粉の高温限界 35℃ ミツバチの活動適温 18～25℃ 晴天日はサイド、妻面全面開放	果実の肥大適温に長くあてる。 高温では小果になるので、換気に努める 灰色かび病は、相対湿度93%以上、結露時間8時間以上で多発。
～収穫期(気温低下期) (9月開花花房の授粉終了～収穫終了まで)	外気温が10℃を下回る頃から保温 日中 20～24℃ 夜間 6～10℃ 果実の着色適温～やや高めを目標とする。 出入口(妻面内側)にカーテンを張ると、保温性が高まる	果実の着色に必要な積算温度を確保する。 晴天が見込める日は、気温が低い朝に30分程度換気し、ハウス内の結露を乾かす。その後、閉め込んで目標温度まで上昇させ、果実の肥大適温にあてる。

3 基肥の施用量

すずあかね基肥チッソ施肥基準は、春定植で7kg/10a、秋定植で10kg/10a。

施肥前に土壌ECを測定し、ECが0.3dS/mより高ければ減肥する。

土壌消毒を行った場合、**基肥のチッソを20%減肥する。**（白ろう果防止のため）

すずあかね 基肥チッソ成分 減肥の目安

施肥前の 土壌EC	10a 当たり 基肥チッソ成分	土壌消毒行った場合 基肥チッソ 20%減 (×0.8)	土壌消毒を行った場合の 100 坪当たり基肥 チッソ成分 (÷3.3)
0.3dS/m 以下	7.0kg/10a	5.6kg/10a	1.7kg/100 坪
0.4dS/m	3.5kg/10a	2.8kg/10a	0.8kg/100 坪
0.5dS/m 以上	無肥料	無肥料	無肥料

4 株養成期の管理

株養成期は、いちごの株が長期の収穫（着果負担）に耐えられるよう、光合成能力の高い葉を展開させ、クラウンや根に同化養分を蓄える大切な時期。葉の寿命が長く保たれるよう施肥量・かん水量を適正に保ち、病虫害の予防防除を行う。

(1) 直接定植の管理（株養成期間 定植後 45～65 日程度）

定植当日か翌日 シャワーで手かん水し、株を落ち着かせる。

定植～7日間 クラウン回りが濡れるよう2～3回手かん水し、活着を促す。

定植～1ヶ月 弱小花房はハサミで切る。できるだけ株に触らず、根を動かさないようにする。

定植1ヶ月～ 一番太い1芽を残し、その他の弱小腋芽は摘除する。

同じ大きさの芽が2本ある場合は、両方残す。

ランナーも、初めのうちはハサミで除去する。

葉数2～4枚頃 急激に養水分を吸収するので、チップバーン対策として、カルシウム剤を施用する。

以降は、収穫開始まで芽を放任する。枯れた包葉（ハカマ）は、クラウンを押さええながら摘除する（放置すると灰色かび病の発生源となる）。

(2) ポット育苗（株養成期間 定植後 35～40 日程度）

定植後に展開した葉が4枚になる頃までの弱小花房は、ハサミで切る。ポット育苗は、定植直後から大きめの葉が展開するので、直接定植よりは養成期間が短い。

受光態勢のよい草姿

定植後、根の生育適温で管理し、地下部優先で初期生育が進むと、地上部の生育はややおとなしめで光の当たりやすいコンパクトな姿となる。

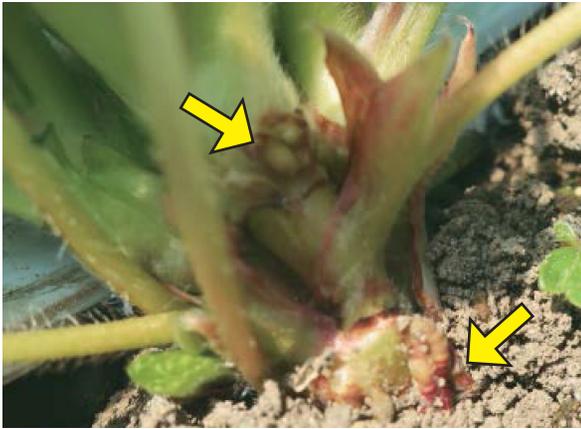
草高の目安

	すずあかね	夏のしずく
出蕾期	15cm	20～25cm
収穫開始	20～23cm	25～30cm



ワンポイント 摘葉後のクラウンへの土寄せ

摘葉後は、芯葉に土がかからない程度に土寄せし、不定根(←)の発生を促す。



葉かき後、土寄せを行ったもの



定植後、株元に散水を行ったもの

株が大きくなり、クラウンがマルチに乗り上げると、不定根が土に着地できないことがあるので、マルチ孔を広げて発根できるようにする。



クラウンがマルチに乗り上げている



マルチ穴を広げたところ